

祖堂集卷第九 石頭下卷第六曹溪六七代法孫

落浦和尚、夾山に嗣ぐ、須州に在り。師諱元安、鳳翔麟游の人なり。姓は淡少より潯陽の懷恩寺に兄祐律師に従つて受業せり。論經に至りては該通せざるは無し。先ず翠微に礼し、次いで臨濟に謁し、各おの進むる所有り。

後に夾山を聞き、直に須陽に造れり。纔かに座具を展べし時、夾山問う、這裏に残飯無し、炊巾を展ぶるを用いず。對えて曰く、但だ有ること無きのに非ず、亦た者処も無し。夾山曰く、只今は、在、對えて云く、今には非ず。夾山云く、什摩処より這個を得來たるや。對えて云く、這個無し。夾山云く、這個は猶お老僧に坐却せらるることを被る底なり。云く、学人は亦た和尚有るを見ず。夾山云く、与摩ならば則ち室内に老僧無し。對えて云く、影を画くことも亦た得ず。夾山讚して曰く、道者は知音にして其の掌を指し、鍾期は能く聴く白牙の琴。

・亦無者処 者の字が可怪しい。

・只今在 今はどうか。在は、嶮に大体同じ。反問に用いる。

師問う、久しく宗風を嚮つ、請つ師一言せよ。夾山云く、目前無法。師云く、錯ること莫れ。夾山云く、纒纒、閻梨、山溪は各おの異なる。任、衰天下人の舌頭を截断するも、無舌人の解く語るを争奈何んせん。閻梨は只た殺人の刀有るを知るのみにして、且らく活人の劔無し。老僧が這裏には亦た殺人の刀も有り、亦た活人の劔も有り。師進んで問う、如何なるか是れ和尚の活人の劔。夾山曰く、青山は劔を掛けず、劔を掛くるも人の知る勿し。

・纒纒 慢慢に同じ。ちよつと待て。

・争奈・何 ・手がつけられない。・どう手をつけるか。

・解語 ものを言うことができる。

・掛劔 帯に劔をかける。

師又た問つ、仏魔の到らざる処は猶お未だ是れ学人の本分の事ならず。如何なるか是れ学人の本分の事。夾山云く、燭は千里の像を明らめ、暗室に老僧に迷つ。

・老僧迷 老僧が見失われている。在りかがわからない。迷自己とは自己を見失つこと。

師又た問つ、朝陽已に昇り、夜月未だ現われざる時如何ん。夾山曰く、竜は海珠を含み、遊魚は顧みず。師この語を聞きて従つ所を知る莫し。便ち夾山に止まり、衣を省ぐるもの数載、労苦を憚らず、日び精微を究めたり。夾山化縁畢るに至り、初め落浦を開き、後に藕溪に住せり。

師は有る時上堂して云く、夫れ学道は、先ず須らく自己の宗旨を弁得すべし、方めて機に臨んで失することを免る可し。只だ惠系の未だ兆さざる已前の如きは、都て是个非个無し。警洸として暫く見聞を起せば、便ち張三李四有り。胡来たりて漢去り、四姓雜居し、各おの其の親を親とし、相い参わりて是非互起し、玄閑固く閉じて識巡開くこと難く、疑網籠牢にして智刀方めて剪らしむることを致す。若し当陽に曉らかに迷子に示さざれば、何を以てか帰を知らん。大用現前せんと欲得せば、但だ頓に諸見を亡す可し。見量若し尽き、昏霧不生ならば、智照洞然として更に物と非物と無からん。今時の学人触目滞り有るは、盖し他の數量に依りて解を作し、他の數量に該括得定せらるることを被り、分寸も移易する能わざるが為なり。所以に、見は色を逾えず、聴は声を越えず、鼻舌身触意法も亦た然り。仮饒い併当して門頭淨潔なることを得るも、自己未だ通明することを得ざれば、還た了せざるに同じからん。若也単に自己を明らむるのみにして、未だ目前を明らめざれば、此の人只だ一隻眼を具するのみ。所以に、是非忻ノ實係して、脱折自由なることを得ず。之を深く傷謙す可しと謂つ。

・致使 その結果こつなる。

・当陽 スバリと。

・該括得定 ピタリと型にはめられて。

・併当 かたづけ。

・脱折 折の字が可怪しい。

問う、如何んが生死を離れんことを求(原作救)めん。師云く、執水して延生を求(原作救)めなば、天楽の妙なるを聞かじ。

・執水 未詳。

問う、四大は何よりしてか有る。師曰く、湛水は波無し、霈は風の撃つに因る。進んで曰く、霈は則ち問わず、如何なるか是れ水。師云く、渾らず澄まず、魚竜の躍るに任ず。

問う、如何なるか是れ一蔵に收め得ざる者。云く、雨滋^{つゐ}おして三草秀で、片玉本来暉く。

・三草 法華経藥草喻品参照。

問う、一毫、巨海を呑み尽くす、中に於いて更に復た何をか言わん。云く、家に白沢の図有らば、必ず是くの如き妖怪無し。後保福云く、家に白沢の図無きも、亦た是くの如き妖怪無し。

・家有白沢之図云々 我が家には白沢のおふだがあるから、そのような妖怪はいない。

問う、凝然の時如何ん。師曰く、時雷は時節に応じ、岳を震わせて塾戸を驚かす。僧云く、千般の運動の个の凝然に異ならざる時如何ん。師云く、靈鶴は空外に糾き、鈍鳥は巢を離れず。云く、如何ん。師曰く、白首の少顔を持す、世を挙げて人の信すること難し。

・白首云々 法華經涌出品に「父少而子老、拳世所不信」。

師に神劔歌有り、異なるかな神劔実まことに奇を標す、古より求むる人の得る者稀なり。匣に在りては謂いひて言いふ耀用無しと、用もちい來きたつて方かためて覺おぼすかつた光輝かがやくことを。猶預なほを破やぶり、狐疑こぎを除のぞき、心膽しんたんを壯たくまんにし神姿しんそを定さだむ。六賊ろくさく既に斯こゝに因よりて剪きれはせられ、八万はつまんの塵勞ちんらう尽つく乃すなはち揮なわらる。邪徒じゃとを斬きり、妖蟲やうちゆうを擲なじ、生死しじ榮枯えいこ齊なしく了します。三尺さんせきの靈蛇れいさ碧潭へきたんを覆おほい、一片いっぺんの晴光せいこう寒月かんげつをてら瑩えいす。愚人ぐふじんは劔けんを望たのみんで舟ふねに尅つして求もとめ、濁浪じやくらうに奔馳ほんしして徒たらに悠悠ゆうゆう。澄源じやうげんを抛棄たうきして渾派こんぱいを逐おう、豈いかでに知らんや神劔しんけんは流ながに隨まわらざるを。他人たにんの劔けんや血脛けつけいを帯たび、我われの劔けんや靈鳴れいめいを含む。他人たにんの劔けん有あるや物の命いのちを傷やつけ、我われの劔けん有あるや生靈せいりやうを救すくう。君子くんしは時ときを得えて彼此たがひを離はなれ、小人こじんは処ところを得えて自ら生なまを傾かたむべし。他家たかは我が家の劔けんを用もちいず、世上じやうじやうの高低かうてい早晩さうばんか平ひららげん。須すらく知しるべし神劔しんけんは功紀こうきし難がたし、魔威まゐを損こめ生死しじを定さだむ。未なほだ之これを得えざる者は易やすも難がたと成なり、劔けんを得えるの人は難がたも却かえつて易やすなり。展ひらぶれば則すなはち法界ほふがい中に周遍しゆべんし、收おさむれば乃すなはち一塵いつじん裏うらに還かへり。若しし此こゝの劔けんを將まさて乾坤けんてんを鎮しづめれば、四塞しさいは終つひに陣雲じんうんの起たること無なけん。

福先ふくせん拈てじて問とう、一語いつご中に須すらく道みちい得えべし、在匣ざいげん出匣しゅげん底そこの劔けん、袁えんは作摩さくま生せいか道みちう。僧無そうむ對たい。自ら代かつて云いふ、且かつらく出匣しゅげん、老兄らうせいと商量じやうりやうせん、還かへた会あするや。

問とう、諸聖しよせい与よ摩まに來きたり、何なにを將まさてか供養くじやうせん。師し云いふ、土宿つちしゆくは錫しやくを持もつと雖なほも、是こゝれ婆羅ばら門もんならず。

問とう、西天さいてんは一人ひとりの一人ひとりに伝え、彼此たがひ委曲ゐきよくを垂たれず。誰たれか是こゝれ知音しよじんの者ものなる。師し曰いはふ、野老やら門前もんぜんには朝堂あさどうの事ことを話はなさず。進すすんで曰いはふ、朝堂あさどう（原作当げんさくたう）の事ことを話はなさずして、合あた何事なにごとを談はなするや。師し曰いはふ、未なほだ別者べつじやに逢あはざれば、終つひに拳けんを開ひらかず。進すすんで曰いはふ、一人ひとりの朝堂あさどう門下もんげより來きたらざる有り、合あた何事なにごとを談はなするや。師し曰いはふ、量外りやうがいの機けは徒たらに擊目げきめを勞らうす。

問う如何なるか是れ無慚無愧底の人。師曰く、出家せず、持戒せず。進んで曰く、出家せず、持戒せずし来たること多少時ぞ。師曰く、虚空を劈破して看弁取せよ。進んで曰く、即今如何ん。師曰く、叢に向つて杜排行せず。進んで曰く、与摩ならば即ち該括し得ざるなり。師曰く、未だ叢の与摩に道つを藉せず。

・杜排行 不詳。

・未藉叢与摩道在 藉字の意不詳。在は句末の強辞。

問う、如何なるか是れ大人相。師曰く、十方を坐断(原作端)して點頭せず。

問う、廓落世界に什摩と為てか目前の法を弁せざる。師云く、曙色未だ分たずして人の覺せんことを思つ、天曉に及んで当に明らむべし。云く、還た留め及ぶや。師曰く、及と不及とを言つこと莫れ。但だ我が与に道え。云く、師宗を弁し得ず。師曰く、弁せざれば即ち親し。

問う、凡聖不到の処は即ち問わず、凡聖を尽くさざる処如何ん。師曰く、師子窟中に異獸無く、象王行く処に狐蹤勿し。

・師子窟中云々 達道者の領域は小人どもの近づけない超絶の世界である。

問う、警然として便ち見る時如何ん。師曰く、曉星は曙(原作暑)色を分つ、争でか太陽の輝きに似ん。

如何なるか是れ本来の者。師云く、一粒荒田に在り、耘らずして苗自ら秀す。僧云く、若し一向に耘らざれば、草の埋却し去ること莫きぞ。師云く、肥骨は藟藟に異なり、暮稗は終に映ゆること難し。

問う、如何なるか是れ西来意。師云く、爛爛たり当軒の竹、霜を経て自ら寒からず。学人更に問を申べんと擬す。師云く、只だ聞く風撃の響知らず幾千竿なるか。

問う、不思議の処に行到する時如何ん。師云く、青山は常に歩を運び、白月は輪を移さず。

問う、大衆雲集す、師意如何ん。師云く、開拳して旧宝を明らめ、握手して今時を謝す。

問う、如何なるか是れ沙門行。師云く、仏に逢うては鬘頭に坐す。僧曰く、忽ち和尚に遇う時如何ん。師曰く、閻梨の来たる時は老僧は不在なり。

問う、日の未だ出でざる時如何ん。師云く、直木に乱枝無く、靈羊は角を掛くること難し。

問う、如何なるか是れ雲水の意。師云く、一輪の孤月、万像齊しく耀く。僧曰く、移輪の事如何ん。師云く、潭中に影無く、戸外は珍に非ず。

問う、祖意と教意と遠た同か別か。師云く、群を出でて角を戴せず、三韻況んや同すること難きをや。進んで曰く、投機憑意の句、焉んぞ同輪ならざるを得ん。師云く、春かに抜きんでて海底を測る、三湘は深さ酌む可し。

問う、古人に言つこと有り、動は是れ法王の苗、寂は是れ法王の根なり、と。苗は則ち問わず。如何なるか是れ法王の根。師曰く、誰か奈何んせん。僧曰く、此は猶お是れ苗なり。如何なるか是れ法王の根。師曰く、竜は洞を出でず、誰人か奈何んせん。

問う、量郭無涯、什摩と為てか自己を容れざる。師云く、最後の一句、始めて牢関に到る。要津を巡断して、凡聖を通せず。任養たい天下は忻忻たるも、老僧は獨然として顧みず。却つて云く、莊周と胡蝶と二俱に是れ夢、汝道え、夢は何よりか来たる。

問う、孤燈自ら照らさず、室内の事如何ん。師云く、飛針走線は時人会するも、両辺を透過するは却つて還た希なり。

問う、満満の竜官、一塵を該し得ず、塵外の事如何ん。師云く、三跳して潘籠を出づるは、雲外の者に如かず。僧曰く、学人は朝廷の貴を重んぜざれば、條然として只摩に休す可からず。師云く、去れ、養は我が語を会せず。進んで曰く、三跳外の事如何ん。師云く、虎を射て中らず、徒らに没羽を勞す。

問う、方法は一に歸す、一は何の所にか歸する。師云く、水を撃つて波瀾を動かせば、其中そこに影を見ること難し。

問う、牛頭未だ四祖に見えずして百鳥の花を銜えて供養す。見えし後、什摩と為てか来たらざる。師云く、玄河泛起す雪花の浪、無平の孤燈は暗宵に明るし。

師に浮需歌有り、秋天雨滴す庭中の水、水上に漂漂として需の起るを見る。前なる需已に滅して後なる需生じ、前後相い續きて何ぞ已りを窮めん。本もとと雨滴に因りて水の需を成し、遠た風の激するに因りて需は水に歸る。知らず需と水とは性に殊なること無くして、他の転変に隨つて將て異なることを無すやを。外は明瑩にして、内は虚を含み、内外叭臙なること宝珠の若し。正しく澄波に在りて有るに似るを看るも、動著するに及んで又た無きが如し。有無動靜事は明らめ難く、無相の中にあ有相形あわる。只だ知る需は水中に向いて出づることを、豈に知らんや

水は需より生ぜざることを。権りに需跡を將て余の身に況くらぶ、五蘊虚擯して仮りに人を立つ。解よく蘊の空にして需の不実なるに達して、方はめて能く本来の眞を明見す。

師遷化に臨みし時云く、老僧に事の諸人に問う有り、若し這个是と道わば頭上に更に頭を安ず。若し這个不是と道わば頭を斫りて更に活きんことを覓む。第一座云く、青山は足を挙げず、日下に燈を挑げず。師便ち出でよと喝すらく、我が這裏に人の對つる無し。衆中に還た新來の達士の出で來たつて老僧が与に又送する有りや。從上座對えて云く、此の二途に於いて、請つ師問わざれ。師云く、更に道え。對えて云く、某甲道い尽さず。師云く、我は衰の尽不尽に管せず。更に道え。對えて云く、△甲は待者無くして祇對する能わず。師便ち出でよと喝すらく諸阿師且く歸堂せよ。

当日の初夜後、師侍者をして從上座を喚ばしむ。上座便ち上來して侍立す。師問う、從上座、年は多少ぞ。對えて云く、二十八なり。師云く、太だ懶せり。甚だ須らく保持すべし。生縁は什摩いすこ処ぞ。對えて云く、信州の人なり。師云く、今日の事、閻梨の道破を被りて、老僧の意に稱い得たり。我が這裏は、数年出世するも並びに一個無し。今日閻梨は老僧を又送せり。△甲の先師、初めて船子に見えし時、船子問い先師祇對せる因縁、改めて頌に為りて曰く、目前無法、意は目前に在り。他は是れ目前の法ならず、耳目の到る所に非ず。只だ四句の中、阿那个は是れ主句なる。從上座遲擬す。師云く、速与、速与、下頭の蘆子冷ゆ、衰に辜負することを欲得ほつせず。形跡すること莫れ。從上座云く、実に会せず。師便ち綬胸して蒼天と哭せり。從上座一たび走り下りて僧堂に去ゆかず、直に如今に至るまで更に消息無し。師前みて云く、送舟は掉さず清波の上、劔峽に徒らに勞す木鵝を放つことを。

・又送 送終。最後の見取りをつける。野辺おくり。最後のしめくくりをすること。

・此二途 這个是と不是との二途。

・只如 且如。たとえば、と云ふ。

・速与 はやくしろ。与が助辞となるのは速与と早与の二字のみ。

・下頭瀟子冷 不詳。

・形跡 かたくるしくする。

・蒼天 死者を悼む言葉。

師は光化二年戊午の歳十二月二日に遷化せり。春秋六十五、僧夏四十六なり。

盤竜和尚、夾山に嗣ぐ、洪州に在り。師諱は可文。初め盤竜山に住し、後ち上藍に居す。

僧有りて落浦に問う、一需未だ発せざる已前、如何んが其の水躬を弁ぜん。浦云く、舟を移して水勢を諳んじ、棹を挙げて波瀾を別つ。此れに因りて師に問う、一需未だ発せざる已前、如何んが其の水躬を弁ぜん。師云く、舟を移せば水を弁せず、棹を挙げれば則ち源に迷う。

逍遙、夾山に嗣ぎ、高安に在り。未だ行録を覩ざれば、始終を決せず。

問う、洪爐の猛配、何物をか烹鍛する。師云く、仏を烹し祖を烹す。云く、仏祖は作摩生か烹する。師曰く、業の其中そこに在り。進んで曰く、喚んで什摩業と作すや。師曰く、仏力も如かず。

問う、一切衆生に皆な仏性有るに、什摩と為てか仏有り衆生有るや。師云く、肯えば即ち衆異を同にし、肯わざれば即ち衆同を異にす。

・為什摩有仏有衆生 二つの名が立てられるのは何故か。

・肯 がぶりと受けとる。

問う、古人に言つこと有り、有ることを知る底の人は直に須らく有ることを知らざるべし、と有ることを知らざる底の人如何ん。師云く、識性は共同なるも、俱に兼戴無し。進んで曰く、有ることを知らざる底の人、如何にしてか有ることを知るを得ん。師曰く、語取する乃ち人なり。

- ・ 直須不知有 有ることを知らないといつことではなくてはならない。否定形を、当為を示す語の下に置くことは文語にはない。
- ・ 識性共同 知有と不知有の人の。
- ・ 兼戴 両者が共通にいただくもの、両者をくくるもの。
- ・ 語取 俗語にちがいないが、あまり見ない。
- ・ 乃 ……すると……ところが逆に、しかるに、かえつて。
- ・ 不人 人たることに於いて失格する、知不知の主体がドロップする。

問う、如何なるか是れ祖中の祖。師曰く、息不肯破為有明人決。

- ・ 師の答え、お手あげ、読めない。

師垂語して曰く、大家、那裏に去きて火に向え。又た云く、火は即ち養の向うに従すも、身を燒著するを得ず。対えて曰く、法身は四大を具う、誰か是れ火に向う者ぞ。

更に垂語して曰く、古時は祖法を伝う、如今は祖法を伝えず。

- ・ 如今不伝祖法 今から祖法がはじまる。

先の洞安和尚、夾山に嗣ぐ。未だ行録を覩ざれば、化縁の終始を決せず。

僧有り問う、如何なるか是れ和尚の家風。師云く、金糞は子を抱きて霄漢に歸り、玉兔は懐胎して紫微に入る。僧曰く、忽ち客の來たるに遇うに、何を將つて祇對するや。師云く、金糞は早朝に猿の摘みて去り、玉花は晩後に鳳の銜み來。

黄山和尚、夾山に嗣ぐ、撫州に在り。師諱は月輪、恥中の人なり。

師初めて夾山に參するや。夾山にして問う、汝は是れ什摩處いずこの人なりや。對えて曰く、恥中の人なり。夾山云く、還た老僧を識るや。對えて曰く、還た学人を識るや。夾山云く、然らず。子は且らく老僧に草鞋價を還せ、然る後ち老僧は江陵の米價を還し了らん。師云く、与摩ならば則ち却つて和尚を知らず、未だ江陵の米の作摩價なるをも委せず。夾山讚して曰く、子は善く能く哮吼す。

・不然 相手の反問の仕方を全体否定したもの。

・与摩云 そついうことなら和尚に借りはなし、米代がいくらかも知らん。委は、知る。

師初めて開堂するや、衆に示して曰く、祖師西來して特に此の事を唱う。自是もより諸人は攸せず、外に向つて馳求し、赤水に投じて以て珠を尋ね、荆山に就いて而して玉を覓む。所以に道う、門より入る者は宝に非ず、と。影を認めて頭と為すは豈に大錯に非ずや。

・不攸 主体性がない。

問う、如何なるか是れ祖師西來意。師云く、梁殿に功を施さず、魏邦に心跡を没す。

問う、如何にしてか本来の面目を見ることを得る。師云く、古鏡を懸くるを勞せず、天曉には鷄自ら鳴く。

問う、宗乗の一句、請う師商量せよ。師云く、黃峰独脱して物外に秀で、年来たり月往きて冷秋秋。

・ 秋秋 愀愀

問う、如何なるか是れ納衣下の事。師云く、石牛水上に臥し、東西するに自由なることを得。

・ 如何是納衣下事 普段の生活はどうですか。

・ 東西得自由 どこにでも自由に出歩くことができる。東西は、出歩くこと。

詔山和尚、夾山に嗣ぐ、北地に在り。師諱は寰普、未だ実録を覩ざれば、始終を決せず。

一僧有り、礼拝して起ち来たつて立地す。師云く、大才は拙戸に蔵る。其の僧又た一辺に向いて立つ。云く、棟梁の材(原作哉)を喪却せり。

・ 立地 立つ。地は意味のない語助。他に坐地すわる、臥地ふす、下地おちるがある。

・ 拙戸 不詳

問う、實際理地、如何んが歩を運ばん。師云く、幽谷の白雲白雀を蔵し、心を経処に擬すれば山を隔てて迷う。

・ 擬心 分別の心をさしはなむこと。

・ 迷 見て取れなくなる。

問う、祖意と教意とは如何ん。日暁韶山に昏く、其中の事を借りず。進んで曰く、師は還た借るや。師曰く、燈後は口に舌無し。進んで曰く、

与摩ならば即ち句後に伝えざるなり。師曰く、影隔てて明月を貸し、指南の蹤を掛けず。

充天布納、韶山に到る。韶山勸して曰く、聞くならく、叢に充天の氣有りと、是か不是か。対えて曰く、不敢。師曰く、汝に充天の氣有らば、我が這裏には啄地の錐有り。汝若し旗を把りて上来せば、我は則ち釘仍して相い対せん。汝若し横しざまに巨海を吞まば、我は則ち須弥を背杖せん。向上の一路、速やかに道え、速やかに道え。是くの如く三度沓めし後に云く、明鏡当台、請う師一照せよ。師便ち喝して云く、死水に魚無し、徒らに鉤を下すことを勞す。

・充天之氣 充は衝と音通。

・釘仍 旗を立てるくいを打つことか。

・背杖 背おつ。

經賢和尚、石霜に嗣ぐ。師諱懷祐、仙遊の人なり。九座山に受業し、依年具戒す。便ち遐方を歴し、而して普会の門に造り、密に投針の旨に契えり。

問う、如何なるか是れ五老峰前の句。云く、万古千秋。進んで曰く、与摩ならば嗣の絶ゆることを成すこと莫きや。師云く、躊躇して誰に与えんと欲するや。

大光和尚、石霜に嗣ぐ。師諱は居讓、俗姓は王、長安の人なり。衣を摺りて道を訪ねてより、南来し石霜普会門下に造り、一二年の間にして乃ち私に北塔に於いて菓木を栽植せり。麻衣草履、灰心塵面、志し道に存す。

因みに一日、普会垂問して以て浅深を徴す。云く、国家は毎年、五百人をして及第せしむ。朝堂門下還た好きを得たりや。師対えて云く、一人有りて進むを求めず。会云く、何にか憑る。師云く、且らく名の為にせず。

普会又た疾に困りて垂語して云く、今日を除却して別に更に時有りや。師対えて云く、渠も亦た今日是なりと道わず。霜云く、我も也た今日に非ずと道わんと擬す。普会、之を然りとす。此くの如く往復するもの凡そ數則、函蓋異なること無し。盤泊するもの二十余載。時に檀越胡公有り、室を尽くして帰依し、請つて大光山に住せしめたり。

・栽植菓木 石霜の法を嗣ぐ決意の表明。

・放 使役の助辞。

・憑何 何を自分の足場にするか。

学人有り問う、混沌未分の時如何ん。師云く、時(原作特)教阿誰か叙ぶる。

問う、古人に言つこと有り、門を出でずして而も天下の事を知る、と。如何なるか是れ門を出でずして而も天下の事を知る。師云く、猶お是れ第一家の主。如何なるか是れ天下の事。師云く、清 如何なるか是れ向上の事。師云く、戸を出でず。如何なるか是れ戸を出でず。師云く、別什摩と為てか却つて別なる。師云く、衆に斉しからざればなり。

又た毎に徒に示して云く、一代時教は只だ是れ一代時人を收拾するのみ。直饒たてい剥し得て徹底するも也た只だ是れ个の了を成得するのみ。衰、便ち納衣下の事と将当あまつ可からず。所以に衰に向つて道う。四十九年明不尽、四十九年標不起と。

・将当 思い込む。

僧問う、只だ達摩の如きは是れ祖師なりや。師云く、是れ祖ならず。僧曰く、既に是れ祖ならざるに、又た東土に來たりて什摩をか作す。師云く、汝の祖を攸せざるが為なり。僧曰く、攸せし後如何ん。師云く、方めて是れ祖ならざることを知る。

・攸 進んで受けとめる。

問う、保任底の人の一念を失する時如何ん。師云く、始めて常に在ることを得。僧曰く、大魔王と作る時如何ん。師云く、暫時の間のみ。僧曰く、最後の事如何ん。師云く、者裏に在らず。

問う、跡を絶ちて玄にし去る時如何ん。師云く、鳥道は曾って聞かず。

問う、如何なるか是れ沙門行。師云く、海を過ぐるに打船せず。

・打船 船に乗る。

座主、徑山に問う、方法は一に帰す、一も亦た存せざる時如何ん。徑山云く、一も亦た留めず。座主肯わずして便ち江西ゆに去き、雲居に問う、居云く、則ち方法に非ず。亦た肯わずして便ち大光に去きて師に問う。云く、除き尽くさず。座主は之を肯えり。

問う、旋啄同時は則ち問わず、卵子裏の鶏の鳴く時如何ん。師云く、還た音信を得しや。

問う、如何なるか是れ密室。師云く、四よもに觀ず。如何なるか是れ密室中の人。師云く、遠く路無し。

・遠無路 どこまで行っても道がない。

師 天復三年癸亥の歳九月三日、怡然として寂を告げたり。年令六十七、僧夏三十六なり。

肥田伏禅師、石霜に嗣ぐ、師諱は慧光、未だ行録を覩ざれば終始を決せず。

師に頌有り、多くの妙用を修して功夫勿し、返本還源するは是れ大愚。古仏は修證より得ず、直饒い玄妙なるも也た崎嶇たり。

人有つて拈じて長慶に問う、如何なるか是れ多くの妙用を修して功夫勿し。慶云く、与摩を用いて什摩をか作す。如何なるか是れ返本還源するは是れ大愚。慶云く、何ぞ必ずしもせん。如何なるか是れ古仏は修證より得ず。慶云く、従来是なり、養更に修して什摩をか作す。如何なるか是れ直饒い玄妙なるも也た崎嶇たり。慶云く、只だ養の妄外なるが為なり。

・与摩 功夫。名詞的用法。

・作什摩 なにになるんだ、という語気。

・何必 なにも返本還源せんならんことはない。

・妄外 外の字が可怪しい。衍字か。

師又た頌して曰く、心静なれば愁は入ること難く、憂無くんば禍は侵さず。道高ければ竜虎伏し、徳重ければ鬼神欽ぶ。

湧泉和尚、石霜に嗣ぐ、台州に在り。師諱は景忻、仙遊県の人なり。白雲山に受業せり。纔かに尸羅を具するや、便ち祖道を尋ね、而して石霜に参見せり。便ち問う、学人初めて叢林に入る、乞う師、个の入路を示せ。霜云く、我れ道つ、三隻の筋子抛不落と師便ち玄関に契い、更に他往無し。

・契玄関 石霜の境界にぴんと通ずるものがあつた。

康徳一僧有りて来たりて院に到る。路上に在りて師の看牛するに遇う次いで、其の僧識らずして云く、蹄角甚だ分明なるに、騎牛の者識らざるを争奈何んせん。其の僧進前して茶を煎る次いで、師は牛背より下り、近前して不審し、二上座と一処に坐して茶を喫する次いで、便ち問う、今日、什摩処いずこを離れしや。僧云く、那边を離れたり。師曰く、那边の事作摩生。僧茶盞子を提起す。師云く、此は猶お是れ蹄角分明なり。那边の事作摩生。其の僧無对。師云く、識らずと道うこと莫れ。便ち去る。福先代つて云く若し与摩ならざれば、争でか道者を識り得ん。又た代つて云く、且座喫茶。

・争奈騎牛者不識何 さあ困つた。

招慶問う、従上の宗乗中の事、和尚の此間すかんには如何んが言論する。師云く、目前を唱えず。進んで曰く、目前を唱えざることは則ち且く置く、宗乗中の事如何んが言論する。師云く、虚空の地に落つるを待ちて則ち道者に向つて道わん。招慶肯わず。進んで曰く、和尚は如何ん。慶曰く、専甲は則ち当らず、請つ兄弟検点せよ。報慈代つて曰く、寒天に雪の蝗に満つ。

・不当 その柄ではない。

問う、如何なるか是れ水中の水。師云く、霜を凌いで結不成。如何なるか是れ水中の氷。師云く、六月にも曾つて融けず。僧曰く、与摩ならば則ち千日も鎖かし得ざるなり。師云く、二鼠の往来は他そに関わらず。

・二鼠 昼夜に喩える。

南際和尚、石霜に嗣ぐ、江西に在り。師諱は僧一。初め南際に住し、次いで鐘陵大王請つて末山に居せしむ。後ち恥王請つて西院に住せしめ、紫衣と謚号本浄大師無塵の塔を奏せり。

世に処りし時、僧問う、千聖位中、還た陪位せざる者有りや。師云く、有り。進んで曰く、如何なるか是れ陪位せざる者。師云く、明明たり是れ竜の鱗を帯びざること、明明たり是れ牛の角を戴せざること。還た会するや。対えて云く、会せず。師云く、歩行して水に入るも深さを知らず、海底の竜宮空しく摸車す。

・是竜不帶鱗 うろこなしの竜だ。

・歩行入水 せつかく水の上をすたすた歩いても。

・海底竜宮空摸車 竜宮を探してもむだだ。

問う、学人幸いに待觀することを獲たり、乞う師指示せよ。師云く、我若し指旨せば則ち養を厄屈著せん。僧曰く、学人をして作摩生ならしむれば則ち是ならん。師云く、切に是非することを忘む。

・屈 罪のない養に罪をおつかぶせる。

・教学人作摩生則是 いったい私はどうしたらいいと仰しゃるんですか。

問う、如何なるか是れ納僧の氣息。師云く、還た曾つて養に勲著せしや。

・還曾勲著養也無 お前のその氣息がお前の鼻におつたことがあるか。

問う、如何なるか是れ法身の主。師云く、過ぎ来たらす。如何なるか是れ毘盧の師。云く、超越せず。

雲盖和尚、石霜に嗣ぐ、潭州に在り。師諱は源禅、未だ実録を覩ざれば、化縁の終始を決せず。

師、石霜に在りし時、因みに一日作礼して問う、万戸俱に開くことは則ち問わず。万戸俱に閉する時如何ん。霜云く、当中の事作摩生。師曰

く、無位。霜曰く、何にか憑る。師は当時無対。直に半年を得て方始めて云く、人の渠を接得する無し。霜云く、道つことは也た大殺だ道つも、只だ八九成を得るのみ。師却つて和尚の代語せんことを請えり。霜云く、人の渠を識得する無し。

・当中 閉ざされた世界の中。

・直得半年 そのままずっと半年たって。

・接得 accept, treat. 完結態として受けとめる。

・道也大殺道 言つのは仲々の言いぶりだが。

・無人識得渠 見て取れる人はいない。識得は、その実質を見抜くこと。

九峯和尚、石霜に嗣ぐ、江西に在り。師諱は道虔、俗姓は劉、福州候官県の人なり。石霜の密旨に契いてより、便ち九峯に住せり。後ち艶潭の宝峯禅院に化縁せり。

僧問う、無間中の人は什摩行を行ずるや。師云く、畜生行。僧曰く、畜生は復た什摩行を行ずるや。師云く、無間行。僧曰く、此は猶お是れ長生路上の人なり。師云く、養は須らく知るべし、命を共にせざる者有ることを。僧云く、什摩の命を共にせざるや。師云く、長生は氣恒ならず。

師云く、諸兄弟、還た命を識り得たるや。命を知らんと欲せば、流泉是れ命なり。湛寂是れ身なり。千波競い湧く是れ文殊の境界、一亘の晴空是れ普賢の床溝。其の次に一句子を借るは是れ指月、中に於ける事は是れ話月。従上の宗門中の事は節度使の信旗の如し。且らく諸方及び先徳の未だ如計多の名目を建立して指陳する已前の如き、諸兄弟は什摩の躰格に約して商量せん。這裏に到りて、三寸を仮らずして試みに話会し看よ。耳根を仮らずして試みに声を聞き看よ。眼根を仮らずして試みに弁白し看よ。所以に道つ、声前に抛不出、句後に形を蔵せず。

と。尽乾坤都采是れ衰当人の个の躰なり。什麼(いず)原文になし)処(こ)に向つてか眼耳鼻舌を安(あ)かん。但だ意根下(お)に向いて図度(お)して、想を作し解を作すこと莫(な)れ。未来際(あ)を尽くすも亦た未だ休歇(い)の分有らざらん。所以に古人道(う)つ、心意を將(あ)て玄宗を學ばんと擬(あ)するは、西行(せ)んとして却(か)つて東に向(む)つが状(ごと)似(に)し、と論劫(ごん)兄弟に違背(ち)せん。

・一亘 途切れのない。

・指月、話月 靈山話月、曹溪指月(釈迦は月の話をし、六祖は月を指さしただけのこと)。伝灯録十八玄沙章を見よ。

・躰格 格式。

・話会 話の筋を追つて理解する。

・弁白 はつきりさせる。

・抛不出 露呈(れい)され得ない。

・不蔵形 全て露呈(れい)する。

・休歇 けりをつける。

・状似 二語で似るといふ意。俗語。

・論劫 永遠に。

問う、九重に信無し、恩赦(いん)何(い)よりか来たらん。師云く、流光は遍(あ)ねしと雖も、蓄内(ちく)に周(あ)ねからず。流光と蓄内(ちく)と相(あ)い去ること多少ぞ。師云く、堅水の騰波(たう)波、青山の秀色(しう)。

問う、人人(い)ん(い)ん)尽(つ)く請益(しん)すと言(い)つ、未審(い)ふ(か)し、師は何を將(あ)て拯濟(しやう)するや。師云く、汝道(に)え、巨岳(こ)還(あ)た曾(あ)つて寸土(すん)に乏(あ)しかりしや。僧云く、与摩(よ)ならば則(す)ち四海(し)より參尋(さん)するは当(あ)た何事(な)の爲(ため)にするや。師云く、演若(えん)は頭(あ)に迷(あ)いて心(こ)自ら狂(あ)つ。師云く、還(あ)た狂(あ)わざる者(もの)有りや。師云く、有(あ)り。進

んで曰く、如何なるか是れ狂わざる者。師云く、突暁途中に眼開かず。

・汝道云々 もう一握り土を足すと巨岳になるとでも言つのか。

・眼不開 心が迷っている。眼を開けなくても登っている陽は見える。

問う、如何なるか是れ学人の自己。師云く、更に是れ阿誰ぞ。僧曰く、便ち与摩に承当する時如何ん。師云く、須弥は還は更に須弥を戴するや。

・更是 下に来る疑問や否定の語気を強める。いつた。

・承当 うけがう、引き受ける。

問う、祖祖相伝して復はた何法を伝うるや。師云く、釈迦は慳しみて迦葉は富めり。僧曰く、畢竟伝持の事如何ん。師云く、同歳の老人夜灯を分つ。

・復 疑問の語気を表わす。

問う、古人に言つこと有り、諸仏は我が道には非ず、と。如何なるか是れ我が道。師云く、我が道は諸仏には非ず。僧云く、既に諸仏に非ざるに、什摩と為てか却つて我が道を立つるや。師云く、適来は暫く喚び来たるも、如今は却つて遣出す。僧云く、什摩と為てか却つて遣出す。師云く、若し遣出せざれば、眼裏に塵生ぜん。

問う、一切処に見め得ざるは豈に是れ聖ならずや。師云く、是れ聖なり。牛頭未だ四祖に見えざるとき豈に是れ聖ならずや。師云く、是なり。聖境未だ亡ぜず。僧曰く、二(原作一)聖相しい去ること多少ぞ。師云く、塵中に隱形の術有るも、争しでか似かん全身帝郷に入るに。

問う、承るらく、古人に言つこと有り、尽乾坤都来是れ个の眼と。如何なるか是れ乾坤の眼。師云く、乾坤、裏許に在り。僧曰く、乾坤の眼は何こにか在る。師云く、正に是れ乾坤の眼なり。僧云く、還た照燭するや。師云く、三光の勢を借らず。進んで曰く、既に三光の勢を借らざるに、何に憑りて喚んで乾坤の眼と作すや。師云く、若し是くの如からざれば、髑髏前に鬼人を見ることが無数ならん。

・裏許 眼の中。

・照燭 ありのままにものを現前させる。

・髑髏前見鬼人無数 枯れ切っているはずのドク口の周りに、無数の幽鬼妄想の産物)が幻出する。

問う、一筆の丹青、什摩と為てか志公の眞を疑し得ざるや。師云く、僧瑶は却つて志公を許す。僧曰く、未審し、志公は還た僧瑶を肯つや。

師云く、志公若し肯えば、僧瑶は許さざらん。僧曰く、僧瑶は什摩人の證旨を得て却つて志公を許すや。師云く、烏龜稽首す須弥柱。

・僧瑶 名画家。

問う、古人に言つこと有り、眞心妄心と。此の意如何ん。師云く、是れ眞を立てて妄を顕わす。如何なるか是れ眞心。師云く、雑食せず。如何なるか是れ妄心。師云く、攀縁して倒を起こす是なり。僧曰く、此の二途を離れて如何なるか是れ学人の本跡なる。師云く、本跡は離れず。僧曰く、什摩と為てか離れざる。師云く、功德天を敬わず、誰か黑暗女を嫌わん。

・不雑食 涅槃經二「当知如来是常住法、不变易法、如来此身是变化身、非雑食身」。

・功德天・黑暗女 涅槃經十二において、前者は生に、後者は死に喩えられる。

問う、境に対して不動なる時如何ん。師云く、是れ大力人ならず。進んで曰く、如何なるか是れ大力人。師云く、境に対して不動。僧曰く、

前來は什摩と為てか是れ大力人ならずと道いしや。師云く、舎に在りては只だ言いて容易と為すも、筈に臨んで方めて覺る魚を取ることに難きを。

問つ、古人道つ、道は名外に超ゆと。只だ名外の道の如きんば、誰か当た建立せる。師云く、仮名もて道と唱つ、道は自ら名のらず。僧曰く、既に自ら名のらざるに、盧行者は什摩と為てか却つて会せる。師云く、会する処は是れ盧家の境界ならず。如何なるか是れ盧家の境界。師云く、明星の背後に倒さかに牛に騎る。

- ・ 盧行者云々 卷十六南泉章 只如五祖大師、下有五百九十九人尽会仏法。唯有盧行者一人不会仏法。他只会道。
- ・ 明星 会した境界。

問つ、弥勒は元より是れ釈迦の師なり。釈迦は何の拠驗有りて即ち玄ほかに九劫を超えしや。師云く、宝所に遠近無し。遲速に殊倫有るのみ。僧曰く、遲速外に還た分つや。師云く、作摩分たざらん。僧曰く、如何んが分つ。師云く、釈迦は先に達せず、弥勒は後に至らず。僧曰く、任摩ならば則ち衰足に衣を持って更に何人を待つや。師云く、遠信只だ合に補処に通ずべし。僧曰く、通ぜし後如何ん。師云く、竜華会上に慈氏無し。僧曰く、補処は又た是れ何人ぞ。師云く、却つて慈氏に問取し看よ。

- ・ 還分世無 区別があるか。
- ・ 作摩不分 分たないはずがない。作摩は、常に反語。

師上堂す。衆集まる。師云く、空中に一人の説法する有り、声の梵天に振つ。諸人還た聞くや。若也もし聞かざれば、諦聴 諦聴 久立珍重。衆纒かに下らんとするや、師は大眾を召す。衆僧乃ち廻顧す。師云く、錯つて挙すること莫れ。

- ・ 錯 ピントからずれて。

問う、日輪正に午に当る時如何ん。云く、半夜に似たり。僧曰く、与摩の時、日輪は何にか在る。師云く、正に午に当る。僧曰く、既に午に當るに什摩と為てか半夜に似たる。師云く、半夜も亦た午に當る。僧對えて曰く、還た照燭するや。師云く、白雲、光彩を散じ、輪中、影舒びず。師乃ち再び頌して曰く、当午の日輪円に照らさず、却つて三更を指して暫く人に示す。明暗を將て前事を消すこと莫れ、是れ燈辺の具足身ならず。

・影不舒 光の矢が長くのびない。

問う、聖迷と凡迷と如何んが弁ぜん。師云く、聖迷は黒きこと漆の似く、凡明は明るきこと日の如し。僧云く、聖迷は什摩と為てか黒きこと漆の似き。師云く、道うを見ずや、亡僧面前と。僧曰く、凡迷は什摩と為てか明るきこと日の如き。云く、蓑結識する処多きが為なり。僧云く、凡聖に落ちずして如何んが弁ぜん。師云く、千眼も到らず。

・聖迷 聖者の迷。

・凡迷 凡人の迷。

・黒似漆 手のつけられない状況。

・亡僧面前 「伝灯録十八玄沙章、亡僧面前正是触目菩提」。

・結識 きめつける。

問う、古人に言つこと有り、世智と仏智とは名は同じくして躰は別なりと。未審し、世智と仏智と相い去ること多少ぞ。蓑道え、螢光と日光とは又た作摩生。僧云く、与摩ならば則ち勝負に殊なること有り去るなり。師云く、蓑の奴とし郎とするが為に、所以に殊なること有り。僧云く、既に殊なること有るに、古人は什摩に因りて身心一如、身外無余と道いしや。師云く、事既若に全ければ何の同異か有らん。

・勝劣有殊去也 優劣に差があることになりますね。去は、〜という結果を導くことになる。論理的な帰結を表わす。

・奴郎 動詞的に読む。

・既若 すでに。もし。

・古人 南陽慧忠語伝灯録二十八。

・事 万法。

法照和尚問う、承るらく、師に言うこと有り、文殊は是れ用なり、と。師云く、是なり。又た承るらく、和尚に言うこと有り、文殊は是れ方頭なり、と。師云く、去ることは是れ今日よりし去る、是れ方頭ならずして是れ什摩ぞ。進んで曰く、未審し、方頭は還た廻るや。師云く、十人の家活、九人闇を作して一人は知らず。進んで曰く、既に知らざるに和尚は什摩と為てか文殊は是れ方頭なりと道う。師云く、千江は月彩を分つも何ぞ曾つて碧天を下りし。進んで曰く、与摩の時、文殊は什摩処いすこに在りや。師云く、含中に旧時の名を失却せり。

・不是方頭は什摩 これこそ方頭でなくてなんだ。方頭は俗語で、バカ。

・家活 家火、家奇とも書く。器具・道具。転じて人に対する蔑称に用い、犀奇、犀夥なども書く。やつもの

・作鬧 騒動を起す。

・月彩 月そのものを指す。

・含中 不詳

・失却旧時名 かつての評判をなくしてしまった。

問う、九人と摩に来たるに何の音信か有る。師云く、九人は意を得ず。曰く既に意を得ざるに、又た何をか伝語するや。師云く、正に是れ伝語す。未審し、什摩人の語を伝つるや。師云く、寧むし当る舌を截つても、国諱を犯さじ。

・伝語 つたえる。

問う、法雨普く潤すに、枯木は何摩と為てか花無き。師云く、道つを見ずや、高原陸地と。曰く、畢竟還た花を生ずる時有りや。師云く、若し花を生ずれば則ち枯木と名づけざらん。曰く、古人は何摩と為てか、枯木上に一朵の花を生ずと道える。師云く、蓑道え、一人は言わず、一人は炯す、阿那个か無舌なる。

・高原陸地 不生蓮華（維摩經仏道品）。

・若生花云々 花が咲いたらせつかくの枯木が枯木でなくなる。

問う、被毛戴角底の人は何の位次に居るや。師云く、白銀を地と為し、黄金を墻と為す。云く、未審し、此の人に還た師有りや。師云く、有り。如何なるか此の人。師云く、被毛せず、戴角せず。云く、古人は何摩に因りて、直得たとい被毛せず戴角せざるも又た勿交渉と道いしや。師云く、古人は異中の異を明らめんが為に、所以に重ねて洗面せり。

・古人云々 卷十六南泉章 有人便問、如何是異中異。趙州云、直得不被毛不戴角、又勿交渉。

問う、中下の者は即ち断送するを偈るや。師云く、是れ曲勸に落在す。僧云く、只だ上上の者の如きは還た断送するを偈るや。師云く、家夫は嚼飯を喫せず。僧曰く、古人は何摩と為てか、直得い上上なる者も又た須らく撃発すべしと道いし。云く、灼然たり、撩著すれば便ち去くこと。誰か蓑の刀刀すること有るを要原文になしせん。僧云く、与摩ならば即ち刀刀するは猶お須らく断送すべし。師云く、是なり。僧曰く、只だ上上たる者の如きは如何んが撃発せん。師云く、鷄子の過ぐる時、人の驚かざる有り。

・断送 殺す、かたをつける、仕末する。宋代では、葬式を出す。

・曲勸 親切すぎる。

・家夫 不詳

・撃発 活を入れることが。卷十三招慶章問、目次口廂底人来、師如何撃発。目次口廂は失意のさま。

・灼然 灼然たり……というのが禪録での用法

・撩著便去 ちよつと突つけばはつと飛び出す。

・刀刀 叨叨。べちやべちや喋る。曲勸といふことになる。

・驚 ぱつと目をさます、はつと起き上る。

問つ、大闡提人は作何いかに行季するや。師云く、刀を露わにして劔を生ぐ。僧曰く、何人を殺さんと擬するや。師云く、凡聖祖仏惣べて須らく尽却すべし。僧曰く、尽くせし後、此の人は什摩いすこ処おに向いて合殺するや。師云く、合盤裏うらに合殺す。僧云く、合殺せし後如何ん。師云く、鷲洪は雪林中に入らず。

・向什摩いすこ処お合殺 どういう究極の在り方をするか。

・合盤 ふた付の皿。

問つ、朝生の子は還た年涯を具するや。師云く、鳳は霄漢に騰るも青雲は知らず。僧云く、入門後の事如何ん。師云く、門裏うらに忘却す白頭びやくとうの児。僧曰く、与摩よまならば則ち少年の父有ることを知らず。師云く、鷲洪は己おのれに雪林中せつりゆう中に在り。進んで曰く、与摩の時、還た弁へんする処有りや。師云く、鷲洪無なきにあらなず。

・還有弁へん処お也無 見分けようがありますか。

問つ、古人道だうつ、山下の檀越だんえつ家かに向いて一頭の水篋すいけつ牛ぎうと作らんと、狸奴りぬ白纂びやくさんと還た分ぶんつや。師云く、作摩さくま分ぶんたざらん。僧云く、如何いかんが分ぶんつ。

師云く、狸奴白纂は頭に角無きも、山下の纂牛は再び角を生ず。僧曰く、与摩ならば則ち古人は一頭の水纂牛と作り去れり。師云く、若し一頭の水纂牛と作さば則ち古人を屈著するなり。僧曰く、和尚は前来、什摩と為てか再び角を生ずと道いし。師云く、再び角を生ずれば則ち断たざるを悲しみ、頭に角無ければ則ち流に入らず。

・ 古人 南泉。

・ 還分也無 ちがいがありませんか。

・ 作摩不分 ちがわんことがあるものか。

・ 再生角 二度目に生えた角をもっている。

・ 古人作一頭水纂牛去也 古人はもとともとアニマルな水纂牛になったわけですね。

・ 若作一頭水纂牛 もし狸奴白纂と区別された水纂牛になったと見なすと。

・ 悲不断 角が断たれないのを悲しむ。

問う、従上の宗乘は、請益すること即ち是なるか、請益せざること即ち是なるか。師云く、三年の大旱、東海は知らず。僧曰く、与摩ならば則ち外より得ず。師云く、内も亦た得る可からず。僧曰く、内ならず外ならざる時如何ん。師云く、是れ具足せず、是れ欠少せず。僧曰く、畢竟如何ん。師云く、窮め尽くさず。

問う、仏法の両字は怨家の如ごと似き時如何ん。師云く、兔角は汝の打するにまが従す、我に兔子を還し来たれ。僧曰く、兔子に豈に是れ角有りや。師云く、仏法の両字、何よりして立つや。立たざる者如何ん。云く、兔子無かる可からず。

・ 打着ける。

・ 不可無兔子 兔なしでは済まされない。

南嶽玄泰和尚、石霜に嗣ぐ。居る所の蘭若は山の東に在りて七宝台と号せり。平生高潔にして手下に門徒を立てず。其の遊礼の僧は或いは娶り或いは散ず。故に常准無し。

師来農遷化せんとするに、今日並びに僧の到る無し。自ら山口に出で、一人を喚び得て香薪を山阿(原作所)に修めしめ訖つて、被衣して坐し、乃ち二偈を書して曰く、今年六十五、四大將に主を離れんとす。其の道は自ら玄玄、个中に仏祖無し。又た曰く、剃頭するを用いず、澡浴するを用いず。一堆の猛火千足万足。偈し畢つて一足を垂れて逝けり。茶毘して靈骨を収め、堅固大師の塔の左に墳す。平生の所有(あつち)る歌行偈頌は、寰海の道流の耳目に遍し。此には尽くは彰わさず。

宝盖和尚、石霜に嗣ぐ。未だ行録を覩ざれば化縁の終始を決せず。

僧問つ、巻を罷め書を停むる時如何ん。師云く、書巻は曾つて展べず。僧曰く、再び挙する者如何ん。師云く、挙する人は意を得ず、汝は早すてに第二に落ちたり。進んで曰く、朝庭に赴かざる者如何ん。師云く、還た及第するや。僧云く、金舊の名字を争奈何んせん。師云く、世号は曾つて通ぜず。僧曰く、与摩ならば則ち金箱の玉印、分付する処無けん。師云く、銜号は曾つて彰わさず。僧云く、直に奮鬪霑わざる時如何ん。師云く、竜床は曾つて臥せず、九五は曾つて登らず。

・ 還及第摩 それで及第するのか。

・ 霑 余徳をこつむる。

玄泉彦和尚、岳頭に嗣ぐ。

問つ、如何なるか是れ声前の一旬。師は咩咩す。進んで曰く、転ぜし後如何ん。師曰く、什摩か是れ太だ道を塞がざる。

・ 転後如何 牛がもとのところへもどつた時、牛が別なものに生れかわつた時。

・ 太不 太は、唐代では限られた用法しかない。太不などという使い方は唐代にはない。こういう表現は不可能。原文に誤記があるのである。

問う、青山、頂を露わさざる時如何ん。師曰く、玉兔は春を知らざるも、是れ無分曉ならず。進んで曰く、直に与摩なることを得る時如何ん。師曰く、脅仙は月宮に生れて、仏家の調に処せず。

・ 分曉 さころ。

・ 与摩 無分曉。

・ 不処仙家調 調と曉は韻を踏んでいるから、処という字が具合わるい。

烏巖和尚、巖頭に嗣ぐ。師諱は師彦、未だ行録を覩ざれば始終を窮むる莫し。

問う、頭上に宝蓋現われ、足下に雲生ずる時如何ん。師云く、被枷帶巡の漢、頭上に宝現われず、足下に雲生ずること無き時如何ん。師云く、猶お棚の在る有り。畢竟の事如何ん。師云く、齋後困せり。

・ 困 つかれた、眠くなった。

問う、天は覆わず、地は載せず、豈に是ならずや。師云く、若し是ならば則ち覆載せらるることを被る。学人云く、若し是ならざれば、烏岳顔んど遭わんとす。師、名を称すらく、師彦。

・ 顔遭 意味がはつきりしない。

問う、如何なるか是れ諸仏出身の処。師云く、蘆花は海底に沈み、劫石は陽春に過ぎ、火配は長に水を流し、仏は此こより出身す。

師垂問すらく、尽十方世界唯だ一人にのみ属す。或いは急疾の事有らば如何んが相い告服せん。広利和尚対えて云く、任汝い世界の爛壞するも、那の人は亦た汝を彩せじ。報恩対えて曰く、若し和尚は是れ竜頭蛇尾と道わば、也た只だ是れ个の瞎漢なり。

・ 急疾事 一大事。

・ 如何相告報 那一人にどう知らせるか。

・ 不彩 取り合わない。彩は、正しくは採、項とも書く。

靈巖和尚、巖頭に嗣ぐ、吉州に在り。師諱は慧宗、姓は陳、福州長溪県の人なり。龜山に受業し、依年具戒せり。便ち宗師を慕い、一たび巖頭に見ゆるや、密に旨要を伝えたり。

僧問う、如何なるか是れ学人の自己本分の事。師云く、眞金を抛却し、瓦礫を拾得して什摩をか作す。

・ 本分 もちまえ。

・ 眞金 そついつ問いを発するお前自身。

羅山和尚、巖頭に嗣ぐ、福州に在り。師諱は道閑、姓は陳、長溪の人なり。龜山に出家す。纔かに尸羅を具するや、便ち祖道を尋ね、巖頭の密旨に契えり。

初めて開堂せし時、纔かに攬衣昇座するや、乃ち云く、珍重と。時に学者有り、出で来たつて申問せんと擬す。師便ち出でよと喝して云く、什摩処にか去き来たる。

僧有り跣山和尚の与たぬに延寿塔を造り、畢手して和尚に白せり。和尚便ち問う、汝は多少の錢を將て匠人に与えしや。僧云く、一切は和尚に在り。跣山云く、汝は為復はた三錢を將て匠人に与えしや、為復兩錢を將て匠人に与えしや、為復一錢を將て匠人に与えしや。若し道い得れば吾が与に親しく塔を造れり。僧無對。

師、大嶺に在りて住庵せし時、其の僧到れり。師問う、什摩処より来たれり。對えて云く、跣山より来たれり。師云く、跣山和尚は近日什摩の言句が有りし。其の僧具さに前事を陳ぶ、師云く、還た人の道い得たる有りや。對えて云く、未だ人の道い得たる有らず。師云く、汝、跣山に却迴して道え、大嶺和尚、挙するを聞きて語有り、と。若し三錢を將て匠人に与つれば、和尚は此の生に決定して塔を得じ。若し兩錢を將て匠人に与つれば、和尚は匠人と同じく一手を出だして塔を造れり。若し一錢を將て匠人に与つれば、匠人を帶累して眉鬚一時に墮落せん。

其の僧便ち迴りて跣山に拳ゆ似せり。跣山便ち威儀を具し、大嶺を望んで嘆じて曰く、將に謂えり人無しと。大嶺に古仏有り、光明射して此間すかに到れり。却て云く、汝去ゆきて大嶺に向つて道え、猶お十二月に蓮花開くが如きなり、と。其の僧却迴して師に拳ゆ似せり。師云く、早已すに龜毛長ずること数丈なり。

・ 汝將多少錢与匠人 俺の法にどつという値をつけるか。自分の評価を数字で表わせばどうなるか。自分自身をかけた問い方。答える方も全身かけて答えねばならない。

・ 親造塔 親は、自分での意。

・ 若將三錢与匠人 其の僧が。

・ 和尚此生決定不得塔 跣山和尚は。

・ 同出一手 共同出資して。

・ 帶累匠人 和尚は匠人をまきぞえにして。

・ 一時 その場で。

・猶如十二月蓮花開也 不思議

・早已 とつくの昔から

師又の時、上堂して云く、宗門の深奥は合た作摩生か話会せん。真心は定め難く、実理は何ぞ詮せん。祖代は褒揚して知見を曲垂す。俊土は大事を顕わし、次第して施行して仏魔を破することを為す。撮原作撤して深際に帰し、靈光密に布く。教を撮原作撤して現前せしめ、意を挙げて宗を明らめ、大海に光流せしむるも、禅と道とを聞き、跡を削り声を吞む。仏と祖師とは古路に明明たり。摩騰竺法は黄葉に何ぞ殊ならん。大藏教文も図書し得ず。若し宗乘の一路を論せば、海口も宣ぶること難し。何ぞ見ざるや、釈迦は室を掩い、淨明は口を杜づるを。暫く波瀾を息む。接物応機は須らく通俊の士なるべし。時に応ずること風の如く、機に応ずること電の如し。一点来たらざれば猶お死漢に同じ。当鋒の一箭、誰か肯えて承当せん。是れ俊流ならざれば徒らに措口を勞せん。上古流今、奇特に過ぐるは無し。若也未だ匠伯に逢わざれば、低首側聆し、意下に尋思するも、卒に摩弱不著ならん。古話を挙するを記し、言侶を繋惑す。空劫に送向するも、未だ輪廻を免れざらん。將に作家を抵敵せんとするも、驢年にも終に是の処無し。珍重。

・話会 話の筋を追って理解する。

・詮 説明する。

・褒揚 ほめて一般に知らせる。

・垂 伝えのこす。

・俊土 切れる男。

・密布 一面に敷きつめる。

・拳意明宗 意は教の意。

・光流 光は、広く。

- ・海口 長広舌ですらも。
- ・宣 広く一般に告げる。
- ・釈迦云々 涅槃無名論
- ・一点不來 少しでもそうできないなら。
- ・流今 流の字が可怪しい。
- ・無過奇特 奇特以上のものはない。
- ・意下尋思 心の中であれこれ考える。
- ・摩弱 なでる。群盲が象をなでる時のように。
- ・不著 うまくしあてない。
- ・抵敵 ハンマーでたくみに試験してみる。たく
- ・驢年 いくら年を重ねても発展のないロバの年。

因みに鄭十三娘、年は十二、一師姑に随つて西院大匠和尚に参見せり。纔かに礼拝して起つや、大匠問う、この師姑は何摩処に住すや。対えて云く、南台の江辺なり。匠山便ち出でよと喝す。又た問う、背後の老婆子は何摩処に住すや。十三娘放身して進前するもの三歩、又手して立つ。匠山再び問う、この老婆子は何摩処に住すや。十三娘云く、早すに和尚に對え了れり。匠山云く、去れ去れ。纔かに下りて法堂の外に到るや、師姑、十三娘に問う、尋常、我れ禪を会すと道い、口の鈴の如きに相い似たるに、今日は何摩と為てか、大師に問著せられて惣べて無語なるや。十三娘云く、苦なる哉、苦なる哉、この眼目を具し、也また我は行脚すと道うに、納衣を脱取し來たりて十三娘に与うるも、(十三娘は)著し得ず。

十三娘は後に師に拳似し、便ち問う、只だ十三娘の如きんば、大匠に参見し与摩に祇對せるは還た平穩を得たりや。師云く、過無きを得ず。

娘云く、過は什摩処にか在る。師乃ち之を叱す。娘云く、今日便ち是れ錦上に更に花を添えたり。

・放身 身をパツと動かすこと。崖から跳びおりたり、馬から跳びおりたりすることも放身といふ。

・苦哉苦哉 やれやれ、いやになつちやうわ。

・具這个眼目 ちゃんと目をもっている。

・也道我行脚 行脚もやっていると云っているのに。

・与十三娘著不得 他動詞の目的語が次の語の主語になる構文はよくある。

・還得平穩也無 びたりだったのでしょうか。平穩は穩當。

・錦上更添花 花をそえていただきました。

又の時に上堂して云く、理上の通明は仏と斉肩し、事上の通明は成な諸聖に同じ。事理俱に通ずるは喚んで什摩とか作す。天下に横行して羅籠自在。須らく是れ与摩の漢なるべし。機に臨んで隱現し、搓迷下に臨時の二字あり(自由ならん。是れ養翳蜻蜻(原作惹惹)底の便ち解く)会得するならず。若し実に未だ会せざれば、卒に奈何んともす可からず。三句より四句に至るまで、羅籠して交も通すること、若し向上の事を会せざれば、什摩処にか得ん。道うを見ずや、上士は領関せず、と会するや。若し是れ超倫の作者ならば、瞥然として便ち休せん。如今且らく与摩の漢有りや。出て来たつて試みに弄すること一転し看よ。作摩生か精彩せん。若也縦奪する解あわざれば、且らく自ら曠劫已来の不可思議底を識取して、常に現露せしむること自由自在なるべし。若し師子の地に拠るを論ずれば、且らく作摩生か道わん。干般の設用も未だ野干鳴を脱せず。透古透今、声前に看取せよ。無事。珍重。

・羅籠 思いどおりにコントロールする。好きなとおり取り込む。大商人が値段を好きなように操作する。俗語。

・不領関 関守りなんかしない。

・縦奪 縦は、はなつ。奪は、とりこむ。

・拋地 ピタツと地面に足ふんばつて、次の動作にかかるかまえ。

軫上座問う、只だ岳頭和尚の如きんば、洞山は好个の仏、只だ是れ光彩無しと道えり。未審し、洞山に何の虧闕有りて便ち光彩無しと道いしや。師、無軫と喚ぶ。無軫応請す。師云く、灼（原作酌）然たり、好个の仏、只だ是れ光彩無し。軫云く、大師は什摩に因りて無軫の話を撥するや。師云く、什摩処か是れ陳老師の汝の話を撥するなる、快すみやかに道え、快やかに道え。無軫説き得ず。師便ち之を打つ。

・洞山好个仏云々 卷七岳頭章参照。

・只是 元来、ひたすらに、オンリーの意だが、しかしの意味なつてくるのは唐末頃である。…だがしかし。

問う、如何なるか是れ宗門中の流布。師乃ち展手す。

問う、急急に來たり投せり、請う師一接せよ。師云く、会するや。對えて云く、会せず。師云く、箭は過ぎたり。

又た大徳の師に參ず。師問う、大徳、号は个の什摩ぞ。對えて云く、明教。師云く、還た教を会するや。對えて云く、分に隨う。師、拳を豎起して云く、靈山會上、与摩を喚んで什摩教と作すなや。對えて云く、喚んで拳教と作す。師笑つて云く、与摩は是れ拳教なり。師却つて足を展べて云く、与摩の時、喚んで什摩と作すや。大徳無對。師却つて云く、是れ脚教なること莫きや。

師、遷化に臨みし時上堂す。昇座して良久し、左手を展開す。主事云く、東面は黒し。師僧退後せよ。師又た良久し、右手を展開す。主事又た云く、西面は黒し、師僧退後せよ。師却つて云く、師恩に報いんと欲せば、志しを守るに過ぐるは無し。王恩に報いんと欲せば、大教を流通するに過ぐるは無し。歸り去らん。歸り去らん。呵呵、珍重。

・黒暗い。

・退後 引きながる。

祖堂集巻第九

祖堂集巻第九

石頭下巻第六曹溪六七代法孫

